



Title	日本人学習者に見られる数量詞不使用の傾向について
Author(s)	張, 恒悦
Citation	外国語教育のフロンティア. 2022, 5, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87564
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本人学習者に見られる数量詞不使用の傾向について

An Error Analysis of Numeral-classifier Compound in Japanese Speakers' Written Chinese

張 恒悦

要約

日本語を母語とする中国語学習者の作文や会話において、数量詞の不使用により不自然な中国語が産出されることがよく見られる。例えば、*我有哥哥。→我有一个哥哥。

このような数量詞不使用の問題に関して、これまで多くの研究がなされてきた。誤用調査・分析を目的とした研究もあれば、中日対照言語学的観点からアプローチした研究もあるが、そのほとんどは数量詞そのものに拘り、より広い視野による考察が行われていない。

一方、数量詞の附加は必ずしもすべての文脈において必要とされるとは限らない。前出の誤用例“*我有哥哥。”は、単独では不自然であるが、次のように後続文が付くと、問題なく成立する。“我有哥哥，没有姐姐。”

こうしたことから、数量詞が必要か否かということは、決して数量詞自身によって決定されるわけではないことが見て取れる。

そこで本稿では、先行研究を踏まえつつ、数量詞そのものへの検討にとどまらず、コンテキスト分析も視野に入れて、数量詞不使用の問題について考察を加える。さらに、中国語教科書における数量詞の導入状況への調査を行い、その結果を踏まえ、数量詞に関する誤用を防ぐ教授法を提案していく。

キーワード：数量詞不使用、誤用、日本語母語話者

1. はじめに

日本人学習者の作文や会話によく見られる誤用傾向の一つとして数量詞の不使用が挙げられる。

(1) *我有哥哥。→我有一个哥哥。

このタイプの誤用については、これまで誤用調査や対照言語学的視点による研究がなされてきたが、そのほとんどは考察の焦点が数量詞そのものに置かれていたため、コンテキストからの制限やインプット方法による影響などについての分析があまりされてこな

かった。

本稿では、先行研究を踏まえつつ、教育現場から得られた誤用例を基に、数量詞不使用の状況を明らかにする。また、中日両言語の比較対照の視点に加え、コンテキスト分析も視野に入れて、数量詞の必要・不必要の原因を検討する。さらに、中国語教科書における数量詞の導入状況への調査を行い、その結果を踏まえ、日本人学習者にとって習得しやすい数量詞の教授方法を提案する。

2. 先行研究

郭春貴 (2001) では、数量詞不使用の傾向が日本人学習者によく見られる誤用の一つであると指摘した。樋口 (2007) では、日本人学習者を対象としたアンケート調査から得られたデータをもとに、数量詞不使用の実態を示した。しかし、なぜこのように数量詞の不使用が起こるのかについては、両論文では深い分析がなされるに至っていない。

大河内 (1985) では、中日両言語の比較対照を通して、中国語では数量詞が多用される原因が「個体化」にあると論じた。日中両言語の構造の違いに基づき、綿密な分析を行った当該論文は、中国語文法研究に大きな影響を与えてきた。樋口 (2007) が指摘したように、大河内 (1985) 以降、多くの研究が同論を踏まえ理論展開してきている (郭春貴 1995、古川 1996、史有为 1997、杉村 2006 など)。

しかしながら、これらの研究は、数量詞そのものへの言語学的考察を主眼にしており、学習者の習得過程に深く関わるコンテキスト制限やインプット方法からの影響については触れていない。

3. 数量詞不使用の状況

必要な数量詞が使用されていない、という問題の誤用例を整理してみると、以下のよう
に、誤用が一定した位置に現れることが分かる。

まず、Aタイプを見てみよう。

A 有 (一个) N (所有・存在)

(2) *我有特别的饮食习惯，就是每天吃甜点。

→我有一个特别的饮食习惯，就是每天吃甜点。

(3) *我有比我大两岁的哥哥，常常一起玩。

→我有一个比我大两岁的哥哥，常常一起玩。

(4) *他家前边有大公园，很漂亮。

→他家前边有一个大公园，很漂亮。

(5) *起居室里有很大的电视机。

→起居室内有一个很大的电视机。

Aタイプは先行研究で最も多く取り上げられた文型の一つである。筆者が収集したデータにおいてもAタイプの誤用頻度が高い。“有”は「所有」と「存在」のどちらかを表しているが、どちらにおいても目的語を修飾する数量詞の不使用が目立っている。

Bタイプは先行研究ではあまり言及されていないが、実際Aタイプと同等の頻度で現れている。Bタイプにおいても目的語の前では数量詞の不使用がよく見られる。

B 是 (一个) N

(6) *他是能干的人。

→他是一个能干的人。

(7) *我母亲是容易感到寂寞的人。

→我母亲是一个容易感到寂寞的人。

(8) *我经常去上海, 上海确实是好玩儿的地方。

→我经常去上海, 上海确实是一个好玩儿的地方。

(9) *小豆岛是人口约三万的小岛。

→小豆岛是一个人口约三万的小岛。

興味深いことに、Bタイプと同じ言語環境で、数量詞「一个」が使用されているにもかかわらず、非文になった例もある。その多くは、「~の一つである」という表現意図から来たものだと推察することができる。

(10) *在大阪, 章鱼小丸子是一个最有名的小吃。

→在大阪, 章鱼小丸子是最有名的小吃之一。

(11) *生两个女孩是一个我的理想。

→生两个女孩是我的理想之一。

(12) *邓小平的代表经济政策的一个是改革开放。

→邓小平的代表经济政策之一是改革开放。

(13) *狗是不会说人的语言的一个家人。

→狗是不会说话的家人之一。

“有”“是”は代表的な状態動詞であるが、動作動詞が述語を担う場合でも、目的語に必要な数量詞が付加されていないため、不自然となったケースも少なくない。例えば、将来の未実現の事象について述べるCタイプ。

C 将来の未実現の事象

(14) *20年后, 我想买大房子。

→20年后, 我想买一个大房子。

(15) *我找不到工作的话, 我想认真找好人, 跟他结婚。

→我找不到工作的话, 我想认真找一个好人, 跟他结婚。

(16) *20年后, 我想有温暖的家。

→20年后, 我想有一个温暖的家。

(17) *我有两个梦想。一个是找好工作, 另一个是建立幸福的家庭。

→我有两个梦想。一个是找一个好工作, 另一个是建立一个幸福的家庭。

次は、Cタイプとは反対に、過去に実現した事象について述べるDタイプである。

D 過去に実現した事象

(18) *我度过了人生中最长的暑假。

→我度过了人生中最长的一个暑假。

(19) *他来到我的房间, 给了我巧克力。

→他来到我的房间, 给了我一个 (块/盒) 巧克力。

(20) ? 我去上海旅行的时候, 给妈妈买茶了。

→我去上海旅行的时候, 给妈妈买了一盒 (包/袋) 茶。

(21) ? 我今天早上吃面包了, 现在不饿。

→我今天早上吃了一片 (个) 面包, 现在不饿。

このように、DタイプとCタイプでは、過去・未来/実現・未実現という区別があったにもかかわらず、目的語に数量詞を必要とする点に変わりはない。このことは、数量詞の使用は、決してテンスやアスペクトなど時制という文法要素から影響を受けるものではないことを物語っている。

4. 数量詞不使用の原因

4.1 日本語からの干渉

以上の例文から、数量詞不使用は以下の環境で起きやすいことが判明した。

①文中位置は目的語の前である。

②数詞は「一」に限られている。

③名量詞がメインである。

ところが、日本語文において、数詞が「二」以上でなければ、数量詞に相当する数詞・

助数詞の組み合わせが使用されないことが一般的である。

次の例文とその日本語訳を比較されたい。

- (22) 起居室里有一个很大的电视机。(5) 修正例
リビングには大きなテレビが(*一つ) がある。
- (23) 我母亲是一个容易感到寂寞的人。(7) 修正例
母親は(*一人) 寂しがり屋だ。
- (24) 小豆岛是个人口约三万的小岛。(9) 修正例
小豆島は(*一つ) 人口3万人の小さい島である。

日本語訳では中国語文のように、「一つ」「一個」のような数詞・助数詞を付けることができない。つまり、中国語では「一+名量詞」は有標であるのに対して、日本語では「一+助数詞」は無標である。

このように中日両言語間には、ずれがあるため、この位置での数量詞は、日本人学習者にとって気が付きにくく、マスターしにくいものである。

4.2 コンテキストによる制限

前節にある通り、(10) - (13) で誤用が起きた原因は、「~の一つである」が「一个~」に置き換えられたからである。即ち、日本人学習者は数量詞の役割を単なる「モノの数」として理解している。

実際に、「一+名量詞」は「ものの数」というより、文の完結性に関わる重要要素の一つである。

一般に、「一+名量詞」がなければ、文は完結しておらず、言いきれていないという印象を与えやすい。

- (25) *起居室里有很大的电视机。(5) 再掲
- (26) *20年后, 我想买大房子。(14) 再掲
- (27) *我度过了人生中最长的暑假。(18) 再掲
- (28) *我母亲是容易感到寂寞的人。(7) 再掲

ところが、(25) - (28) を以下のように、対比もしくは並列のコンテキストに組み入れれば、問題なく文は成立する。

- (29) 起居室里有很大的电视机, 盥洗室里有很先进的洗衣机。(対比)
起居室里有很大的电视机, 还有很漂亮的沙发。(並列)
- (30) 我想买大房子, 他想买小房子。(対比)
我想买大房子, 还想买大汽车。(並列)
- (31) 我度过了人生中最长的暑假, 他度过了人生中最难忘的暑假。(対比)

我度过了人生中最长的暑假，也度过了人生中最难忘的暑假。(並列)

(32) 我母亲是容易感到寂寞的人，我父亲是容易感到快乐的人。(对比)

我母亲是容易感到寂寞的人，也是容易感到快乐的人。(並列)

このような対比・並列のコンテキストにおいては、むしろ「一+名量詞」が用いられないのが自然である。

よって、目的語の前の「一+名量詞」の有無は、その文を事象の叙述コンテキストと対比・並列コンテキストのいずれかに切り替える変換措置であると言える。

周知のように、形容詞述語文においては、文に完結性を持たせるために、「很」などの程度副詞が必要となってくる。

(33) *今天热。

→今天很热。

一方、「很」などの程度副詞のない形容詞述語文は、しばしば対比・並列コンテキストに用いられる。

(34) a 今天热，昨天不热。(对比)

b 今天热，明天也热。(並列)

こうした事実から、「一+名量詞」は「很」と同様な役割を果たしており、その有無によってコンテキストの切り替えが発動するという文法の仕組みが窺える。

4.3 インプットの問題

ところが、目的語の前に「一+名量詞」が付加された文は、会話のやりとりにも出現しにくいことに注意されたい。

物の数や量を話題にする場合を除き、疑問文では、「一+名量詞」を使用しないのが普通であり、また、質問に対する回答にも「一+名量詞」を使用しないのがほとんどである。

(35) 你是日本人吗？ 我是日本人。

*你是一个日本人吗？ *我是一个日本人。

(36) 你有字典吗？ 我没有字典。

*你有一个字典吗？ *我没有一个字典。

(37) 你想买什么？ 我想买苹果。

*你想买一个什么？

(38) 你买什么了？ 我买苹果了。

*你买了一个什么？

その原因は、特定の相手に対して質問する場合、同じカテゴリーの他のメンバーと比較・区別した上で性質確認をする場面が多いためである。つまり、

“你是日本人吗？”=「あなたは日本以外の国の国民ではないよね」

ところが、第三者の立場から、受信相手に知られていない人物・状態・事象のプロセスを説明・叙述するスタイルであれば、「V（一+名量詞）N」が出番になる。

例えば、田中一郎について紹介する場合、次のように表現されるのが一般的である。

(39) 这是一位日本人，名叫田中一郎。

つまり、「V（一+名量詞）N」は、一方的に語る叙述スタイルに適用されるものである。

したがって、現在、会話スタイルを中心とする中国語教科書の設計では、「V（一+名量詞）N」に関するインプット不足が生じると考えられる。

5. 教学上の提案

内田（2021）では、「是（一+名量詞）N」構造が、HSK 1級の試験問題によく出ていると指摘している。例えば、

①下午我去商店，我想买一些水果。

②他在医院工作，是个医生。

HSK 1級というのは、入門者向けで最も易しい等級である。それにもかかわらず、「是（一+名量詞）N」が多用されているということは、これは初心者にとっても避けて通れない基本表現であることが示唆される。

このことを裏付けるため、筆者は中国語母語話者8人を対象に、「医者である父親について職業紹介」というテーマで聴き取り調査を行った。その結果、「我爸爸是医生。」という、不自然であり、“我爸爸是个医生。”の方がよい」という回答が得られた。

しかし、このような日常的表現でありながら、誤用が起りやすい「V（一+名量詞）N」に関しては、中国語教育現場ではきちんと教授されているとは言い難い。現に、筆者の手元にある中国語初級教材15冊（調査教材一覧を参照）を調べたところ、「V（一+名量詞）N」を教授するものは1冊もないことが分かった。

以上の事情に鑑み、本稿では、以下のような提案を行いたい。

1) 「V（一+名量詞）N」を文法項目として取り上げる必要がある。

前述のように、「V（一+名量詞）N」構造における「一+名量詞」は、日本語では同

じように表現されないため、日本人学習者がその違いに気が付くのが困難である。したがって、「V (一+名量詞) N」を文法項目として取り上げるべきであり、教授する際には、最も分かりやすく、使用頻度の高い「是+一+名量詞N」から導入することが適切であると考えられる。

2) 対比・並列の例文を通しての導入を回避すべきである。

路浩宇 (2021) でも指摘された通り、日本で使用されている教科書では、所有・存在を表す「有」の用法を説明する際、“他有姐姐，没有妹妹”のような対比・並列の例文が多く用いられる。学習者はそのコンテクストによる制限が分からないまま真似をすると、“*他有姐姐。”のような不自然な中国語を産出してしまう。よって、初級学習者向けの文法点の導入では、対比・並列の例文は避けるべきである。

3) 叙述スタイルも教科書に取り入れるべきである。

前節で触れたように、現在の中国語教科書は主に問等形式の会話スタイルから構成されている。そのため、叙述スタイルに使用される数量詞に関するインプットが不足しがちである。そのような事態を避けるため、会話スタイルだけでなく、叙述スタイルも教科書に取り入れるべきである。

参考文献

内田 慶市

2021 「中国語教育と検定試験」(PPT) 中国語教育学会第19回全国大会シンポジウム2 (オンライン開催)

大河内 康憲

1985 「量詞の個体化機能」『中国語学』232、日本中国語学会、1-13。

郭 春貴

1995 「日中両国語の数量詞の用法の相違」『広島修大論集・人文編』35(2)、71-89。

2001 『誤用から学ぶ中国語』白帝社、東京、85-88。

史 有为

1997 「数量詞在动宾组合中的作用」『中国语言学报』第8期、25-38。

杉村 博文

2006 「量詞“个”的文化属性激活功能和语意的动态理解」『世界汉语教学』第3期、17-23。

中川 正之ほか

1997 「日中両国語における数量表現」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版、東京、95-116。

樋口 幸子

2007 「単数時の数量詞付加に関する誤用調査」『中国語教育』第5号、46-69。

古川 裕

1996 「数量詞限定名詞句の認知文法」『中国語学論集』東方書店、東京、237-266。

路 浩宇

2021 「从一次“有”字句的教学所想到的」『日本中国語学会 電子通訊』

<https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/> 第178号 (2021年5月31日)

調査教材一覧

1. 『楽しい中国語コミュニケーション』2002 (高橋良行ほか)、同学社
2. 『初級中国語12課』2019 (陳淑梅ほか)、同学社。
3. 『佳縁漢語』2014 (孫樹林ほか)、朝日出版社。
4. 『新・中国語はじめました』2008 (瀬戸口律子)、駿河台出版社。
5. 『你好!晴佳』2011 (呉悦ほか)、朝日出版社。
6. 『入門ビジュアル中国』2015 (遠藤光暁ほか)、朝日出版社。
7. 『ちょっとまじめに中国語』(日下恒夫ほか)、朝日出版社。
8. 『気楽に話そう中国語』2012 (郭春貴ほか)、朝日出版社。
9. 『スタートライン中国語 I』2012 (久米井敦子ほか)、駿河台出版社。
10. 『話してみよう中国語』2012 (温琳ほか)、駿河台出版社。
11. 『縁日はとてもにぎやか』2016 (戸沼市子ほか)、郁文堂。
12. 『歓迎!中国語』2012 (大谷通順ほか)、郁文堂。
13. 『ジョイフル中国語』2012 (呉凌非)、郁文堂。
14. 『シンプルに中国語』2020 (荒川清秀ほか)、同学社。
15. 『はじめてまして中国語』2014 (椿正美ほか)、駿河台出版社。

本研究課題は、「ユーザー視点による中国語教育文法設計の方法論構築」(科研費19K00838)での研究の一部である。